

トロント大学図書館研修報告

もりしま ももこ
森嶋 桃子

(三田メディアセンター)

1 はじめに

2011年10月から2012年1月末までの4ヶ月間、カナダのトロント大学図書館（以下、UTL）で研修する機会をいただいた。交換研修協定に基づくもので、慶應からは7人目の派遣である。筆者が担当している主な業務は、雑誌の現物管理と電子ジャーナル管理、レファレンスである。UTLのレファレンス部門には既に複数の職員が派遣されていたこともあり、今回は雑誌の管理と電子資源管理を中心に、本館にあたるロバーツ図書館のコレクション・ディベロップメント部門で研修を行った。本稿ではUTLにおける雑誌の管理を中心とし、冊子体や電子資源、ライセンス情報の管理について報告する。また、近年注目を集めている冊子体の共同保存やコンソーシアムについても取り上げ、今後の方向性をさぐっていく。

2 雑誌の管理

UTLでは業務用システムとしてSirsiDynix社のSirsiを利用している。利用者用OPACインタフェースはOracle社のEndecaである。コレクション・ディベロップメント部門の雑誌セクションにおいて、受入や支払、リニューアルチェック、キャンセルといった業務を行った。

慶應が導入しているEx Libris社のAlephでは、雑誌を扱う際、アイテム（物理単位データ）が見つけにくい、ソートに時間がかかる、あるいは製本すると元の雑誌のアイテムが消えてしまうなど、少しばかり使いにくい部分があった。Sirsiでは取寄せ（貸出）が必要なもののみアイテムが作成される。つまり、通常では雑誌のアイテムは作成されず、OPACに表示されるのは所蔵範囲のみである。保存書庫に行くもののみ、取り寄せのためにアイテムが作成される。製本作業は業者が提供する別システムで行われるため、SirsiやOPACのデータとは連動していない。未製本雑誌はタイトル順で新着雑誌室に並び、製本されると請求記号が付与され、図書と混配される。何巻何号がどこにあるとか、製本中であるとい

いた正確な情報はわからないのだが、利用者も図書館員もそれほど気にしておらず、物理単位の一冊一冊をシステムで厳密に管理しようとする慶應とのポリシーの違いを目の当たりにした。

物理単位のデータが存在しないというのは北米では一般的である。したがって、インベントリ作業もない。システムがそもそも大量の物理単位データの扱いを想定していないのである。一方で、保存書庫に送付するため、近年ハーバードをはじめとする多くの大学図書館で、物理単位データの作成を実施している。そのため、今後は欧米のシステムでも、大量の物理単位データを扱うための仕様が反映されていくのではないかと。

雑誌の管理において、UTLより慶應の方が進んでいるように思われる点もあった。受入の際、タイトルやISSNで雑誌を検索するのだが、UTLでは指定できる検索条件が一つのみで掛け合わせができない。Bulletin、Newsletterといった汎用タイトルでISSNが付与されていない場合は、絞り込みができずに大変だった。発注画面と購読管理でキャンセル情報などのデータが連動しておらず、困ることもあったが、システム担当に依頼してもなかなか直してもらえないとのことだった。テクニカル業務は利用者には直接影響しないため、後回しになりがちなのはどこも同じなのだろう。

雑誌のタイトル管理では、事務用の目録カードが維持されていた。ブラウズしやすい点はよいが、UTLで毎日カードを引くことになるとは行く前はまったく想像しておらず、驚いた。

また、重複書誌も多い。The Globe and Mailというカナダの日刊新聞があるのだが、紙媒体の書誌だけで4つあり、それぞれに所蔵が複数ぶらさがっている。利用者にとってもわかりにくいように思われたが、「データがあり、検索できるのであれば問題ない」という大らかな姿勢が印象深かった。

3 電子資源の管理と提供

電子資源の予算は約1300万カナダドル（約10億

円)である。予算は全学共通のため、EZProxyによるリモートアクセスが可能で、かつ全キャンパスで利用できるというのが契約条件となる。卒業生向け(有料)¹⁾や Walk-in User 向け(無料)のサービスも提供している。

UTLでは慶應と同様、SFXとVerdeで電子資源の管理を行っていたが、2011年夏より、Serials Solutions社の各製品(以下、SS)に移行を開始した。Summon(ディスクバリツール)、360Link(リンクリゾルバ)、360 Resource Manager(電子資源管理)、360 MARC Updates(書誌アップロード)といった各種ツールを利用している。

電子ブックのMARCデータを、360MARCのシステム上でロードできるようになるというのが、移行理由の一つであった。UTLでは慶應と比較すると電子ブックの多さが際立ち、それだけ扱いも重要となっている。従来は慶應と同様、版元から提供されたMARCデータをOPACにロードしていたが、量が多いこともあり、煩雑でトラブルが多かったそうだ。Verdeの導入にあたってはかなりのマンパワーを費やしたようだが、うまく機能しなかった場合は過去に拘泥せずにすぐに切り替えるという点が印象深かった。

SSにおける電子資源データの更新作業は、ナレッジベースのデータに依存している。UTLではInternet Archiveによって蔵書の電子化を進めているが、雑誌のバックナンバーなど、膨大な各冊単位のデータをすべてナレッジベースに登録するのは手間がかかる。UTLでは、EIRという電子資源管理システムを独自開発しており、SS導入以前はこのEIRを用いて電子資源をリスト化し、OPACにデータを流し込んでいた。Internet Archiveで電子化されたデータについては、今後もこのEIR経由でデータを維持する予定である。

ナレッジベースにデータがない場合、SSにデータ作成を依頼しても時間がかかるため、ローカルでのデータ作成を行っている。また、ライセンスごとにパッケージをまとめたい場合も、ローカルデータを作成している。ローカルデータを作成すると、常にメンテナンスの必要性が伴う。そのため、電子ブックなど、買い切りのパッケージが主に作成の対象となっている。

わかりにくい電子資源を利用者に案内する例とし

て、Bora Laskin Law Libraryの取り組みが興味深かった。前述のように、UTLではほとんどの電子資源を全学共通で利用できるが、例外もある。WestlawとLexis.comは、州政府の補助によってロースクール所属者のみ無料で利用できるもので、全学共通のSSやOPACにデータを載せることができない。このため、こういったパッケージや、パッケージレベルのみでタイトルレベルのデータがないもの、さらに冊子体も含め、タイトルを抽出してマイクロソフト社のアクセスで管理し、法律系の雑誌を網羅した独自のジャーナルリスト²⁾を維持している。利用者の便宜を考えると、このような独自システムの維持やカスタマイズは避けられないのではないか。

4 ライセンスの管理

SSでは、ライセンス情報の管理も行っている。Authorized Usersの定義や、デジタルコピーの可否、ILLやリモートアクセスの可否なども登録しており、項目ごとに公開や非公開を選択できる。電子ジャーナルリスト³⁾から“Digital Rights”(デジタル著作権)ボタンをクリックすると、教材としての提供の可否など、公開されている契約条項を見ることができる。約1500のパッケージのうち、実際に登録が済んでいるのはわずか40余りで、残りのパッケージについては、最低限の共通情報のみ掲載している。独自システムのEIRでも以前から契約情報を管理しており、登録されたデジタル著作権に関する情報をOPACから参照することができる。しかし、EIRとSSの契約情報の一本化はされていない。UTLも参加しているオンタリオ州のコンソーシアムOCUL(Ontario Council of University Libraries)では、契約情報の管理のため、Mondo⁴⁾というシステムを開発した。UTLではMondoから得られる契約情報をSSに統合したいという意向がある。さらに、カリフォルニア大学を中心としたコンソーシアム、CDL(California Digital Library)⁵⁾のように、実際の契約書(Vendor License)をPDFファイルで一般に公開する方向を目指している。

5 電子ジャーナルコンソーシアムとビッグディール

UTLはカナダのナショナルコンソーシアムであるCRKN(Canadian Research Knowledge Net-

work)と、前述の州コンソーシアム OCUL に参加している。CRKN は Taylor & Francis や Sage といった大手の版元、OCUL は Annual Review といった比較的小規模の版元と契約している。OCUL も CRKN も国や州の直接の補助はなく、参加館の会員費で維持されている。

OCUL のインフラ部門である Scholars Portal (以下、SP) では、ILL やチャットレファレンスのシステムを維持している。コンソーシアムで購読している電子ジャーナルや電子ブックのうち、ローカルサーバへのロードが契約で許可されるタイトルについては、SP のサーバでアーカイブしている。SP の予算は OCUL が拠出しているが、物理的環境や人員は UTL に依存しているため、SP と UTL は切り離せない関係にある。全学共通のリモートアクセスシステムや電子データのローカルロードにより、維持管理が一元化され、アクセスに関するトラブルが少ないように見えた。

1 月末に CRKN 主催で、ビッグディールとコンソーシアムの今後について、CDL や CRL (Center for Research Libraries)、イギリスの JISC (Joint Information Systems Committee) の代表者による電話会議があった。ビッグディールを脱退した例として、南イリノイ大学カーボンデール校が紹介された⁶⁾。論文を本当に欲しいからではなく、適当に見つかったからダウンロードしているという場合が多く、ダウンロード件数イコール雑誌の価値とはいえない、また、お仕着せのパッケージでは必要ないものも購入せざるを得ず、タイトルごとの選別によってはじめて個々の大学にふさわしいコレクションが築けるという立場からの発言であった。

その反面、ビッグディールを受け入れざるを得ないという立場から、タイトルごとの選別に戻るためには利用統計など大量のデータを分析しなくてはならず、利用者の要求を考えても、もはや不可能に思えるという意見が大半を占めていた。

UTL 内では、CRKN に対する信頼が低下している。支払う会員費に見合うだけの利益を受けられず、JISC と比較すると交渉力が弱いのはといった疑問があり、また、事務局以外に情報が流れてこず、その透明性についても批判がある。そのため UTL では、他国のコンソーシアム (JISC や北米の LYRASIS など) への参加も視野に入れている。まずは

Sage をテストモデルとして、タイトルごとの契約を検討するため、利用統計やコスト、インパクトファクターといったデータの分析を開始している。利用統計データは、SP とベンダーから別々に取得している。いずれは SUSHI プロトコルにより、SS の統計モジュールで機械的に取得できるようにしたいということだった。それぞれのタイトルの必要性について、各分野の選書担当 (Selector) が順位づけを行っている。UTL には、分野ごとの知識を持つ選書担当やコレクション評価担当 (Collections Assessment & Evaluation) といった専門職がいるため、タイトル選定にこれほどの手間をかけられるのだと思えた。

6 冊子体の共同保存

急激な電子化の進展により、利用の減った冊子体の保存が課題になっている。資料一冊あたりの年間の保存コストについて、開架では 4.26 ドル、保存書庫では 0.86 ドル⁷⁾、電子媒体の共同リポジトリである HathiTrust に参加した場合は 0.15 ドル⁸⁾ という試算がある。北米各地で冊子体の共同保存の試みが進められているが、OCUL では Thunder Bay Agreement と呼ばれる取り決めに基づき、コンソーシアム内で最低一冊の冊子を保存しようとしている。しかし、各大学の所蔵がカナダの総合目録 AMICUS や OCLC に分散して登録されており、予算も不十分であることから、実効力を持つには至っていない。

1 月にインディアナ大学を訪問する機会を得たのだが、インディアナ大学はアメリカ中西部のコンソーシアム CIC (Committee on Institutional Cooperation) に参加しており、共同保存プロジェクト Shared Print Project を開始している。インディアナ大学に立派な保存書庫があるため、最初のホスト館として選ばれた。管理の権限は書庫に移動した時点でプロジェクトに移譲される。ワーキンググループを組織し、STM 分野の雑誌で 25,000 冊を目標とし、タイトル候補の選定を開始している。

CDL でも WEST (The Western Regional Storage Trust) という名で、同様の取り組みを進めており、CRL と共同で、冊子体の保存状況がわかるデータベース⁹⁾を作成・公開している。

今回訪問した大学では、雑誌が書架からなくなることで空いたスペースを、インフォメーションコモ

ンズやスタディスペースなど、利用者のために活用している。UTLでは、ロバート図書館と連結して新しい建物を建設し、24時間利用可能のラーニングコモンズとする計画がある。インディアナ大学では図書館以外の部署との連携を進めており、図書館内にライティングセンターやAV編集室があり、学生のためのワンストップポータルを目指している。

7 これからの方向性をさぐる

UTLでは、困難はあっても、それほど他大学との連携に力を入れなくてもやっていけるのではという、ARLランキング3位¹⁰⁾の余裕が感じられた。しかし、日本の大学の予算や規模では、今後はやはり連携が大事になってくるのではないだろうか。連携方法として現実的なのはコンソーシアムへの参加である。カナダのコンソーシアムは外からは理想的に見えたのだが、経済状況に左右されやすいということがわかった。一方で、図書館の主題や規模が似ていると、利害が一致しやすい。電子資源に関しては、物理的な場所にとらわれない、国際的なコンソーシアムが実現する可能性もあるのではないか。日本ではまずJUSTICEの交渉能力が強化され、参加館の多さが電子ジャーナル購読にとどまらない多様な協力を結び付くよう、これからの期待したい。

UTLでは、スタッフや利用者の反応を見るため、開発中のものでもOPACなどのテスト画面をどんどん公開している。レファレンスではオフィシャルでない無料サイトでも良いと思えば紹介している。基本的に「利用者のためであれば100%でなくても大丈夫」という大らかな考えで動いている。国民性の違いもあるが、見習うべき点が多いように思えた。

研修期間を通じ、名前を挙げだすと切りがないほど、本当にたくさんの方々にお世話になった。この経験を今後の業務に生かすことで、少しでもご恩を返せればと思う。

参考文献

- 1) "Digital library for alumni". <http://oneresearch.library.utoronto.ca/alumni-digital-library>. (accessed 2012-07-02).
- 2) "Database of Law Journals Available Electronically and at the Bora Laskin Law Library". <http://www.law-lib.utoronto.ca/journals/search.asp>. (accessed 2012-07-02).
- 3) "University of Toronto Libraries-e-Journals". <http://bf4dv7zn3u.search.serialssolutions.com/>. (accessed 2012-07-02).
- 4) "License Information". <http://ocul.scholarsportal.info/licenses/>. (accessed 2012-07-02).
- 5) "Redacted License Agreements : California Digital Library". <http://www.cdlib.org/services/collections/redactions/>. (accessed 2012-07-02).
- 6) Jonathan Nabe, Fowler David. "Leaving the Big Deal : Consequences and Next Steps". http://opensiuc.lib.siu.edu/morris_confs/14/. (accessed 2012-07-02).
- 7) Courant, Paul. "The Idea of Order : Transforming Research Collections for 21st Century Scholarship". <http://www.clir.org/pubs/abstract/reports/pub147>. (accessed 2012-07-02).
- 8) York, Jeremy. "This Library Never Forgets : Preservation, Cooperation, and the Making of HathiTrust". <http://www.hathitrust.org/documents/HathiTrust-Archiving2009-200905.ppt>. (accessed 2012-07-02).
- 9) "Print Archives Preservation Registry". <http://www.crle.edu/archiving-preservation/print-archives/papr>. (accessed 2012-07-02).
- 10) "University of Toronto Libraries Newsletter Fall 2011". http://www.library.utoronto.ca/utl_newsletter/fall_2011/05.html. (accessed 2012-07-02).